

# 小田原史談

第14号

談史會  
目録丁  
原一幸  
小田原市  
小田原市  
郷土文  
郷土文

## 真説曾我兄弟

中野敬次郎

### 一 壮大無比の富士山麓大演習

曾我兄弟は、今から凡そ七七〇年前の建久四年（西暦一一九三年）五月二十八日に富士の巻狩の行われている岳麓井出の地で、父の仇工藤祐経を討ち取って、十八年辛苦の本懐を遂げた。

鎌倉將軍源頼朝の催した富士の巻狩は同年の五月下旬から六月上旬にかけて行われたものであるが、巻狩というのは、当時の戦斗が騎兵戦術の最盛期であったので、馬上弓射の技術を磨くのを目的として、広野を巻いて大自然の中を駆けめぐって狩猟を行うもので鎌倉武士の実戦的訓練であった。謂はば後世の特別大演習に当るものである。

建久四年には頼朝自ら出馬して、早春三月から四月にかけて下野国那須野が原や武蔵国入間野に巻狩を展開し、五月に入ると駿河国に転じて、四日から富士山東麓の藍沢野に狩した。そして同月十六日から富士山西麓に移って井出に本陣を構えて、附近一帯の原野に狩猟を開始し、世に源頼朝の富士の巻狩と言っているのは、この五月十六日以後の富士山西麓の狩猟を指して呼ぶのである。巻狩が行われた地域は、東方は富士と愛鷹の両山を結ぶ線を限り、西は富士川本流に及ぶ線で、この間に広がる広大な平原の、東西五里三十町、南北一里三十二町、面積六千四百八十町歩に達する地帯であった。この時、西は天子が岳から東は御殿場に至るまでの間に獣類の逃走を防ぐ土塁を築いて、諸々に猪穴を設け、広野を巻いて狩猟が行われた。動員された人員は「曾我物語」によると三百万騎とあるが、これは勿論誇張に過ぎないので、実際は勢子作事の人々も併せて、凡そ四十万人ぐらいであったと言われている。

頼朝の本営は裾野の中央の井出にあって、その宿舎を井出の館、神野の御館、また

「吾妻鏡」には富士野の御旅館と記している。建物は五間四方の仮屋を建てて、風呂に小柴の築垣をめぐらし、四方に一つづつの門を設けていた。

鎌倉武士の大名、小名の諸將の陣屋が、將軍頼朝の館を守護するように、その周囲に柳の歯をひくか如く並び立って壯観を極めた。

曾我兄弟がねらう工藤左衛門尉祐経の陣屋は將軍館の東北側に存在していた。

五月十六日の初日の狩に、頼朝の嫡男源頼家が、十六才で鹿を射止めたので、さい先よしと全軍意気高揚、仁田四郎忠常が荒れ狂う猪の背中に飛び乗って刺し止める事件などもあり、富士の岳麓の林野を震駭させる壮大無比の巻狩が展開したのであった。六月七日頼朝が鎌倉に帰還して、凡そ二十五日間に亘る有名な富士の巻狩は終わったのである。

ところが、この巻狩のさ中に、突如として五月二十八日の雷鳴豪雨の夜に曾我兄弟の仇討が、井出の本陣を舞台として起った。全くえらい騒ぎであった。

### 二 壮烈を極めた兄弟の討入り

曾我兄弟の仇討のことは、最も詳しく書かれたものには有名な「曾我物語」という書物があるが、後世の曾我兄弟に関する殆んどの説話、伝説の原典になっているのであるが、この書は仇討の時から二百年を経た室町時代になって成立した小説風の物語書であって、本筋の史実には略々誤りがないが、枝葉の問題になると粉色が多いで悉くを信用する訳にはゆかない。やはり、最も確実に仇討事件を伝えるものは、鎌倉幕府編纂の日記体記録である「吾妻鏡」であろう。同書の建久四年五月二十八日以降の数日の記録には兄弟に関することが、可成詳しく見えるが、その五月二十八日の条には仇討の有様を次のように記している。

「廿八日、癸巳、小雨降ル、日中以後霽ル、子ノ刻、故伊東次郎祐親法師ノ孫子、曾我十郎祐成、同五郎時致、富士ノ神野ノ御旅館ニ推参致シ、工藤左衛門尉祐経ヲ殺戮ス、又備前国任人吉備津宮ノ王藤内ナル者有リ、平家の家人頼尾太郎兼保ニ与スル依テ、囚人ト為リ、召シ置カルルノ処、祐経ニ属シ誤リ無キノ由ヲ謝シ申スノ間、去ル廿九日日本領ヲ返給セラレ帰国ス、而シテ猶ホ祐経ノ志ニ報ジテ、途中ヨリ更ニ還リ来リ、祐経ニ盃酒ヲ勸メ、合宿談話ノ処、同ジク誅セラレシナリ、愛ニ祐経、王藤内等ノ交セシメラルル処ノ遊女、手越少将、黄瀬川ノ亀鶴等叫喚ス、此ノ上、祐成兄弟父ノ敵ヲ討ツノ由、高声ヲ発ス、之レニ依テ諸人騒動ス、仔細ヲ知ラズト雖モ、宿弟ノ輩皆悉ク走り出ス雷雨鼓ヲ撃チ、暗夜灯を失フ、殊ニ東西ノ間ニ迷イ、祐成等の為メニ多ク疵ヲ被ル、謂フ所ハ平子野平右馬允、愛甲三郎、吉香小次郎、加藤太、海野小太郎、岡部弥三郎、原三郎、堀藤太、白杵八郎ナリ、殺戮ヲ被ルハ宇田五郎以下ナリ、十郎祐成ハ新田四郎忠常ト合イ討タレ畢ル、五郎ハ御前ヲ差シテ奔参ス、將軍御剣ヲ取テ之レニ向イ給ヘント欲ス、而シテ在近將監能直之レヲ抑留シ奉ル、此ノ間

ニ小舎人童ノ五郎丸、曾我五郎ヲ搦メ得タリ、仍テ大見小平次ニ召シ預ケラル、其ノ後ニ静謐トナル、善盛、景時仰テ奉リテ祐経ノ死体ヲ見知ス云々」(原文は漢文)

短文ではあるが、兄弟の仇討の状況や、その時の騒ぎの有様が、誠に力強い文章で手に取るように描かれている。

この夜の仇討が兄弟にとって幸運と言ふべきであったのは、日中は晴れていた天候が真夜中になって雷鳴の大豪雨となり、「吾妻鏡」の形容しているように「雷雨鼓ヲ擊テ暗夜ヲ失イ、東西ノ間ニ迷フ」と言フ有様であつて、兄弟がこれを利用して容易に敵の寝所に闖入したと、工藤祐経が王藤内と酒宴して、手越少将と言フ遊女を抱いて酔後の熟睡に落ち入つていた時であつたので、首級を捧げることは簡単であつた。

ところが、遊女の手越少将や亀鶴が喚声をあげて叫び廻つたのと、兄弟が父の仇を討つたと大声を発したので、而も將軍頼朝の寝所の真近のところでの出来事であつたので、上を下への大騒動となつたのであつた。

その上兄弟が大荒れに荒れ廻つたので殺傷をうけた者が多数出たが、殺されたのは仇工藤祐経と、その他に、祐経と酒宴して、遊女亀鶴を抱いて同宿した王藤内と、出合の侍、伊豆国の住人宇田五郎重信の三人であつた。

郷土の学者

中垣謙斎を偲ぶ(二)

蓑田長平

以上の如く藩に於ては官軍に異心なきを示していな

四月九日の御沙汰書を受けて間もなく十一日夜遊撃隊と称えて幕下及び諸藩の脱徒二百余人が真鶴、上陸の旨同地よりの報告を受け、十二月に尋問のため役員を出張せしめたが、脱徒の代表として林昌之助は同日真鶴を出立小田原に行つて重臣杉浦平太宅を訪問、

兄弟は女子に対しては一切刃を向けなかつたようであるが、立ち向つて来る侍に対しては、奮迅の勢をもつて斬りまくつたのである。斬られ傷を受けて退いた面々には、武蔵国の住人平子野右衛門、相模の国の住人愛甲三郎季隆、駿河の国の住人吉香小次郎経貞、同じく岡部弥三郎忠光、同じく原三郎清益、同じく堀藤太郎忠家、伊豆国の住人加藤太光貞、信濃国の住人海野小太郎幸氏、豊後国の住人臼杵八郎維信、甲斐の国の住人市川次郎宗光(吾妻鏡にこの人は記していない)など錚々たる名の聞えた全国に武將が十人にもものぼつてゐる。如何に暗夜灯を失う中とは言ひながら、この結果から見ると兄弟が抜群の強さを持つていた事が察せられる。この他に無名の侍で死傷した者も多かつたであろう。ただ「曾我物語」に死傷を受けた者三百人と記してあるが、これは甚だ誇張に過ぎるようだが、さもあれ、誠に壮烈を極めた討入りであつた。(つづく)

【編集部より】

中野敬次郎氏は社会教育課長の要職に在つて郷土史蹟研究者としての第一人者である。曾我兄弟に関する真説を語つた書は未だ世に出ていない。それを此度特別の御厚意に依り十数回に渉つて連載して頂く事となりました。愛読者達の絶大な好評を博する事を期待して止みません。

る。半途にして小田原藩士之を聞き入城を止めんとし、出迎ひ説諭すと雖承引せず入城す、夜に入り杉浦某の宅に着す、老臣渡辺了叟・加藤直衛に對話し、藩主に面接し義兵の盟主たらん事を請わんとす、此日惣軍江の浦に立越滞陣す。

同十三日小田原老臣二名面謁藩主の意を演ぶ、藩主佐幕の志は勿論の事なれども、方今其色を露わす時は却て徳川の為に宜しからず、暫く時機を待つて決せよ、之に依りて兵器金穀望に任せて送るべし、との事なり、於是明勝出城の事に決せり。

同十五日北爪貢、吉浜より小田原に立戻り金策す、同十六日御殿場へ着、北爪貢小田原より到着藩主より贈られる金を携え来り。

以上が林昌之助出陣記の一節であるが、他の二三著書にも「当時其請を容れずと雖慰諭款待して之を帰し又は「光を拒絶し厚く饗して遣る」とあるのを見ればこの事実は間違いないと思ふ。「早々打取るべし」という朝命を受けながら賊徒の巨魁を厚遇し贈金する等

一泊翌十三日警衛を付して真鶴に帰した。

このときの事情について豊原資清氏講述の「明治戊辰小田原藩情概略」に林昌之助出陣記の一節に

閏四月十二日己の刻頃相州真鶴港に上陸す、伊庭八郎、人見勝太郎等と議し、単身にて小田原に到

賊徒が担の行為は明白と云わねばならぬ。惟うに大久保藩は譜代大名として代々徳川の恩顧を受け居るところより義理上からも賊徒を見殺すことは忍びなかつたのではなからうか。当時の世情は幕府あるを知り朝廷あるを知らず、官軍と賊軍との区別さへ判別せず徳川に加担することを忠義と心得おる者が多かつた時代であるので、板狭みにあつた藩が去就を誤つたのも無理からぬと思ふのである。

(続く)

随筆あれこれ

会社乗取り騒動の巻(三)

井上生

政友会本部の建物はホテルの直ぐ裏隣りに在って、目と鼻の先である。私は小オドリしながら馳け出した。

先方に着くと待合室には十人程の先客があつて順番を待って居るらしい。その中には貴族院議員の小塩八郎右エ門氏の顔も見える。名刺を出して受付に渡すと、

「此の通りの御客様ですか。御待ち下さい」と言う。

「いや私は勤務中を抜けて来たのでそうは時間がないのです。今電話での御話しでは直ぐ来いと御話し故

兎に角私の来意を取りついで下さい」と当方は一歩も引かない。すると秘書は「取りついても大丈夫ですね」と念を擦して先生の部屋へ入って行く。では御入り下さい」と許可があつたのでノックして私は室に入る。

見ると先生は窓端の机に向つてこちらへ背を向け立って居られて、何やら名刺の整理でもしておられる様子

である。

「要件は何だ？」私はムツとした。当方の顔も見す要件は何だ？とは何事だ、失礼千万な言葉ではないか

「先生こちらへ御座り願います。御多用の処甚だ相済みませんが五、六分で結構です、何卒御許下さい」

「天下の一大事とか言ったね」と言いながらこさへ向を変えて丸テーブルの椅子にドカッと腰を下して初めて当方の顔を見る。

初対面の挨拶としてはあまりにも粗末で、然も乱暴過ぎる程の言葉であつたらう

「丁度其処には一人の立派な紳士が居られて我々の話し

際には後で判つた事であるが東京商工会議所会頭窪田四郎氏で、あの有名な内田信也先生の笑兄と言う事。

この方は森先生と親友の間柄、そして其の後私共(妻の実家)との関係が生じて

来るのであるが、時間の都合で後に書く事にします。扱て丸テーブルを廻んで相対して話して進む。

「先生！右の様な訳で御座ります。私は未だ若いので何処へでも職は得られます

従つて少しも恐くはないので、支配人が更つても何等影響はありません。只先程申し上げました通り、日本の恥と存じます。サービス

業たるホテル事業には未経験である馬越さんでは到底

日本のプライドを保つ事は難かしいと思ひます。ビール製造とは違ひますからね

それで現社長の様な欧米仕込みの方こそ最適任ではないでしょうか。私が如き平社員がこんな事を申し上げ

げるのは甚だ落越かも知れませんが、私はそれが真実にホテルを愛する者の考え方と思ひますので、御無理な御願いに上りました様な次第で御座ります」

無口な私の説明を聞いて居られた先生は初めて口を開き「株の關係はどうなっているか」「御承知の通りホテルの株式は市場株ではありませぬ。然し目下盛んに馬越系から手が延びて買メをやっています。庶務課長の話では毎日の様に名義書換の手続が取られて居ると申しております。ですが宮内省をはじめ大倉系の株は未だ相当に多い様だとの事

です」すると突然ビクッとする程の大声で「よろしい！」と握りこぶしでテーブルを叩き「君は何も知らぬ顔して自分の本分の仕事を

していなさい」驚いて顔を

見つめて居る私へ「ニコッ

と笑つて居る先生は窓端の机に向つてこちらへ背を向け立って居られて、何やら名刺の整理でもしておられる様子

である。

「要件は何だ？」私はムツとした。当方の顔も見す要件は何だ？とは何事だ、失礼千万な言葉ではないか

「先生こちらへ御座り願います。御多用の処甚だ相済みませんが五、六分で結構です、何卒御許下さい」

「天下の一大事とか言ったね」と言いながらこさへ向を変えて丸テーブルの椅子にドカッと腰を下して初めて当方の顔を見る。

史談会秋の史跡めぐり

九月二日

一詩二歌三句

人類創生及史談

駒嶽開声之湯花

清水専吉郎

太古統足柄箱根

秋風起霧外輪山

山も川も昔とむすび足柄の箱根の谷間声の湯けむり

霧の幕閉じつ開きつ駒が嶽箱根湖走る舟足白し

龍胆に声の湯の花寒寒むし駒が嶽神石近く蟻の塔

箱根山研ぎ細るてふ秋薊

駒岳山頂にて 広沢十五夜

すすきそよぎ白雲湧いて雨匂う

秋草の花のくだちに山冷えて行くほどに車前草の霧流る

秋薊葉のかぐろきて霧の濃く峯わたる霧つきぎに涼気満つ

駒ヶ岳山頂 杉山夢洋

霧湧きて径おぼつかかな花あざみ

霧の晴間おほこの径八方へ霧の頂吹く日盛りの風くらし

神石に新らたなる声秋の風霧晴れて青嶺がのぞくゴルフ場

霧荒らし石に立つ人像の如く霧去りて真下の湖にバスの列

印刷物は

第十四号

弘英印刷

小田原市井細田八一 電話四、一〇八番

昭和三十七年九月十五日発行 (毎月一回発行) 会費 一ヶ年三百六十円 発行人 小田原史談会 編集人 機関紙編集部 発行所 小田原市幸一丁目 郷土文化館内 小田原史談会

<p>株式会社 <b>小田原百貨店</b> 社長 神戸英次郎</p>	<p>明るい生活 楽しい読書 <b>八小堂</b> 小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社 代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社 <b>大雄山線</b> 運営事務所</p>
--	---	---	---

<p>あなたの洋品店 <b>はふや</b> 小田原幸町 TEL2307</p>	<p><b>小田原信用金庫</b></p>	<p><b>きそば庵</b> 小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p><b>松坂屋製菓本舗</b> 小田原市十字二 電話五二七六番</p>
---	-----------------------	--	---

<p>高級陶器の店 小田原市緑1~103 小田原銀座通り 株式会社<b>江島屋陶舗</b> TEL(0465)5427</p>	<p>甘露梅 月の衣 小田原駅前 <b>正栄堂菓子舗</b> 電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店 <b>花田屋</b> 小田原銀座2 電話3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う <b>カメラの光輝堂</b> 小田原駅前 TEL 5965 4859</p>
---	---	---	---

<p>成型加工 プラスチック <b>東海化成株式会社</b> 取締役社長 滝本友信 電話小田原五九二七番</p>	<p>資生堂ホールセール(特契店) ベルマン、バビリオドル、マ ナー、キャロン婦人靴下代理店 有限会社<b>山一商店</b> 小田原市井細田428 電話 3553</p>	<p>建築金物 家庭金物 株式会社<b>星崎仲吉商店</b> 小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>畳表・日用品 問屋 <b>茶利商店</b> 小田原市多古25 電話2341・2374</p>
--	---	--	---

<p>御料理仕出し 御弁当 株式会社<b>東華軒</b> 代表取締役 飯沼相三郎 小田原駅前 TEL(0465)5061~2</p>	<p>純良医薬品 株式会社<b>オタワラ薬局</b> 錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華 <b>松屋</b> 小田原錦通り六 電話三三三三六</p>	<p>銘菓 松菓 銘菓 千代風 銘菓 代菊 甘露梅 銘菓(県指定の店) 電話2376 <b>集栄堂本店</b></p>
--	--	---	---

<p>平野商会 <b>平野久雄</b> 小田原市十字三 電話(〇四六五)二四四九番</p>	<p>写真 <b>イガラシ</b> 小田原市幸3 TEL2534番</p>	<p>趣味の陶器 <b>江島屋</b> 小田原箱根口 電話6602</p>	<p><b>志澤</b> TEL3131</p>
---	---	---	------------------------------